

特集・短期大学の宗教教育

80年代の短大宗教部

元短期大学教授・宗教主任 十 時 英 二

宗教部だより

1980年4月から1991年3月まで
短大宗教主任を務めた。着任当

時、宗教部の実務は副手の業務の一つだったが、1981年度から専属の職員が週3日の囑託で与えられた。早速「宗教部だより」第1号が1981年4月この職員の手書きのガリ版刷りで発行された。14号（83年）からタイプ印刷となり、年5回発行で現在に到っている。広く多くの教職員に原稿をお願いしたが、学生のページも設けられ、学生諸君が本学でキリスト教と出会い体験した貴重な文章を書いている。

横浜移転

1986年4月は横浜校地への移転と
国際教養科の新設という、短大に

とって一大転換期であったが、キャンパスの拡大と学生数の増加で、宗教部にとっても飛躍のときであった。宗教部室が設置され、ここを拠点として諸活動が行われるようになった。87年度から専任の職員が置かれ、宗教部室には多くの学生が出入りしてキリスト教についてのみならず学生生活での内面的な問題など話したり、教会紹介、信仰図書の閲読、教室外での先生との懇談などに使われるようになった。また先生方の協力を得て昼休みや空時間を利用し聖書研究会、読書会、英語・ドイツ語のバイブル・クラスなどの小集会が行われるようになった。学生たちは科や学年を越えて親しく交わる機会を与えられ有益であった。

チャペル

何といても大きなことはチャペル建設であった。移転したらチャペルをという願いは六本木時代からのものであった。横浜キャンパスの青写真が作られるとき、



諸建物の中心にチャペルをと主張したが予算の関係で第一期工事には入れられず、止むなくチャペル用地だけは確保して頂いた。そしてチャペルのための献金は聖歌隊のクリスマス・コンサートの会計の中から1986年に始まった。これがチャペル献金の最初であろう。横浜校地ではチャペルが出来るまで礼拝は集会室で行われたが、奏楽のためアールボルの電子オルガンが81年から86年までの卒業生記念寄付によって購入され86年7月奉獻礼拝が献げられた。大学が開設後チャペルは全学院のものとして建設されることに決定され「東洋英和女学院礼拝堂」の呼称で1991年5月1日献堂式が感謝のうちに行われた。月曜日には大学・短大合同の礼拝が行われており、この礼拝の一致が横浜キャンパスにおける大学・短大の一致の原点であると信じている。

入学時のオリエンテーション・カンファレンス 二つのカンファレンス

と卒業カンファレンスは長く受継がれて実施されている。ずっと御殿場東山荘で行われていたが、学生数の増加に伴って数年前から、オリエンテーション・カンファレンスは学内で全体会、その後各科別の会場に分かれて行なわれ、卒業時には全科合同で実施されるようになった。

これらは短大生活の初めと終りに、キリスト教を基盤とした本学の教育と自己との関わりりを考える大切な機会となっていると言えよう。



横浜校地チャペル

「短期大学“宗教部だより”」から……①

○チャペル完成

皆さんの祈りと献金によって、この春待望のチャペルが完成します。礼拝をはじめ、キリスト教諸活動がますます充実したものとなることでしょう。母校である東洋英和を、これからも気軽に訪ねて下さいね。

(宗教部 鈴木麻子)

No. 52 (1991・3・14 発行) より

○宗教部室設置

新任紹介：宗教部の職員は、月・水・金に来ております。5月から新しい宗教部の部屋ができますので、お訪ね下さい。4月中は宗教主任室に同居中ですので、だめです。

(十時先生談)

No. 1 (1981・4・1 発行) より

○クリスマス・こひつじの会

私は、こひつじの会という聖書研究会に所属しています。そのこひつじの会では、今年のかえで祭で「本当のクリスマス」をテーマに喫茶店をひらきました。それは、来て下さった方、お一人お一人、そして私達自身にとっての「クリスマス」の意味を、もう一度考える事のできる場にしたいと思ったからです。クリスマスにプレゼントを贈り合ったりパーティを楽しむという行事としてだけでなく、イエス様の誕生の記念である事を心から感じて頂きたいと思いました。かえで祭で讃美をした時、私は心の中がなんともいえない暖かさで感謝で満たされて、涙がでえました。こひつじの会のメンバーも私と同

じ様に心が満たされました。

神様が私達の救い主であるイエス様をこの世におくって下さったクリスマスを、今年も多くの仲間とおくれる事を感謝しています。

(保育科2年 宇田川早織)

No. 66 (1993・12・6 発行) より

○礼拝

本学院の基はキリスト教です。二年間を過ごされる中で礼拝、数々の宗教行事、キリスト教特講などに会うわけですが、心の扉を閉じてしまって無関心になるのではなく、その中にある意義を認めて、一つ一つに積極的に関わっていかれたらと願っています。

さて、その一つに毎日行なわれている礼拝があります。1,2限の後の10:10から15分間講堂で守られています。一日の学校生活のひとつ静まって聖書のことばに耳を傾け、讃美の歌を歌うこの短い時間を皆で大切にしたいと思います。オルガニスト希望者、詳しく知りたい方、宗教部までいらして下さい。あなたも是非奏楽奉仕を。また、聖歌隊に入っただけではいかがでしょう。年に何回かの讃美礼拝、特別礼拝での合唱奉仕等々…。

宗教部へは、教会紹介をしてもらいたい時、上記の申し出をしたとき、その他何なりと「活用」して下さい。

(宗教部)

No. 14 (1983・4・27 発行) より

「神さまの導き」によって…

短期大学特任教授 シャーリー・ジュティーン

(聞き手・編集 短期大学専任講師 石井貫太郎)

1952年来日以来、実に40年以上にわたって、米国合同メソジスト教会の宣教師として、我が国のキリスト教布教に多大の貢献をされたジュティーン先生(以下「J」と記述)にインタビューを行いました(聞き手以下「I」と記述)。

尚、先生は、特に短大の宗教主任を永きにわたってお勤めになりました。

I：私ども英和の関係者にとってジュティーン先生は、カートメル女史やハミルトン女史らとともに馴染みのある外国人の先生なのですが、先生が日本に来られ、英和に赴任されることになったいきさつなどを、ご自由にお話し下さい。

J：私は小さい時分から信仰の道に生きることを決心していました。大学を出てからも、小学校の先生をしながら、布教活動を行う宣教師となることを志願していました。ほどなくその機会が訪れ、所属していた福音教会のイリノイ州でおこなわれた本部の委員会側から三つの選択肢が提示されました。米国の辺境地区、アフリカ、そして日本のいずれかで、私の夢がかなうというわけです。全くのインスピレーションのようなものを強く感じ、私はその時日本へ行くことを選んだのです。その後2年間、小学校教員の任期を勤め、大学院で勉強しながら出発を待っている間に、日本では東洋英和という学校に赴任するということが決定しました。いずれも、神さまの導きによるものだと考えています。英和に来て、本当に良かったと心から感じています。

I：日本の印象はいかがでしたか。

J：私はアメリカから貨物船に乗って日本へやってきたのですが、横須賀の港から車に揺られて東京まで来る間に見た窓外の光景は、今でも忘れられません。ほとんど車が走っていない道路、1階建ばかりの建物、全体として黒い色をした町並みなど。私はその日から2年の間、日本語学校での勉強に没頭しましたが、日本の印象はあまり変わりませんでした。英和の教壇に立つようになった頃から、少しずつこの国が復興し始めたように記憶しています。

I：先生は大変流暢な日本語を使いこなしておられますが、実はそれはこの時のお勉強で培われたものだったのですよね。日夜、外国語の勉強に苦勞している英和の学生たちに何かアドバイスをして下さい。

J：やはりどんな言語でも、実際に「使う」という心がけというか、その目的が明確に自覚されていなければ、いかなる努力をしても上達しないと思います。私の場合には日本に来てから、自分の専門の保育学やキリスト教関係の日本語などを勉強し始めたのですが、やはり言語は日常会話をマスターでき



ないことには実際には役に立ちません。日常会話ができなければ、とにかく日本で私がやるべき仕事自体ができないわけで、そうなる则自分が日本に来た意味がないわけです(笑)。ですから、とにかく周囲の日本人の人達とたくさんお話をし、また、その過程で技術的に上達していった点もあると思います。しかし、今では割合に日本人の学生さん達が英語をよく勉強しておられますから、最近来日してくる宣教師の人達の中には、日本語を全く話せないのに十分に仕事を遂行できる人もいます。結局、私の頃が一番苦勞だったのかも知れません。でも、そうであるが故に、逆にたくさんの真の友人を作ることができる時代だったと思います。必要に迫られれば、学生さん達の語学力も上達しますよ(笑)。

I：それにしても、いくら先生の信仰上のお仕事のためとはいえ、たった一人で、しかも女性の身で、見知らぬ外国へ、しかも、つい先ごろまでは戦争の敵国であったような所へ行かれることに不安はありませんでしたか。

J：もちろんたくさんありました(笑)。自分で行くことを希望しているうちは良かったのですが、いざ出発の期日が迫ってくると、不安で不安でなりません。しかし結局は、これも神さまの導きなのだ考えることで、その不安を克服できました。聖書に、イエスさまが一人分のお弁当を5,000人の人々に与えたというお話があるのです。これは、4つの福音書に6回も出てくる有名な逸話です。私は、こんな無力な自分が日本へ行ったところで大して役には立たないかも知れませんが、神さまがいつも一緒にいて下さるのだと考えることで勇気が湧いてきました。私のような者でも、イエスさまのお弁当のひとつになることぐらいはできるのではないかと考えたのです。

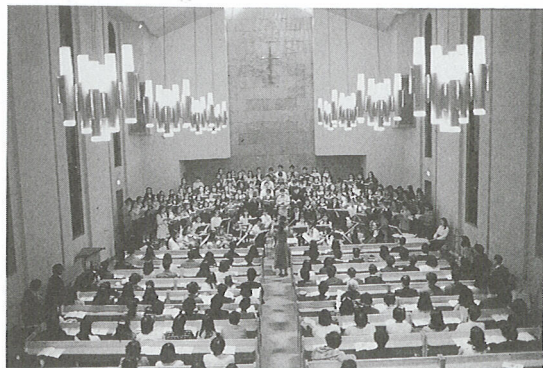
I：先生が感じられたような不安は、きっとカートルメル女史やハミルトン女史も感じられたのでしょ

うね。

J：きっと同じだったと思いますよ(笑)。

I：ところで、先生は今お話戴いたように、大変な苦勞をされて英和に赴任されたわけですが、以来、今日に至るまでの英和における宣教師としての人生の中で、先生にとって最も嬉しかったことは何ですか。

J：私は赴任以来、文字通り英和の成長過程をつぶさに見てきました。私が英和ではじめて「保育方法」という講義を通訳を付けて担当した当時は、まだ現在の短大は、保育科だけしかない、1学年30～40人程度の小さな単科の学校でした。その後、英文科や国際教養科が増設され、また同じキャンパス内に大学が設置されました。このように、英和の組織は時代の変遷とともに改変されてきましたし、また、今後も様々な状況の変化に対応して改革されていくことと思います。しかし、時代とともに組織構成の変化や表現方法の相違こそあれ、その根底にあるキリスト教教育の精神は、厳然として英和の基盤に根付いていたと思います。礼拝を行い、キリスト教概論の講義を学び、様々な宗教活動を通じて神さまと学生自身との関わりを考えることだけは、決して失われることがなかった英和の普遍的な要素です。私は、宣教師として、この最も大切なことが継続してきたこと、そして、今後も継続していくであろうこ



クリスマス・コンサート

どを、最も嬉しく思います。

I：最後に、今の日本の若者、特に英和の女子学生たちに向けて、何かお言葉を下さい。

J：今の日本は私が来日した当時よりも遥かに豊かになり、物も豊富でメディアや交通機関も発達していて、大変刺激が多く、選択の幅の広い人生を送れる国となりました。しかし、そのような時代であるからこそ、むしろ人間が本来求めるべきものを、周囲の環境に惑わされることなく追求して欲しいものです。もちろん、それは個人個人によって違うものでも構いません。実は、私はこの度、平成6年7月15日付けで日本の永住権を獲得しました。従って、この国は、私にとって米国とともに第二の母国となりました。そういう個人的な気持ちも含めて、願わ

くばその彼女たちの求めるものが神さまの関わりであって欲しく思っています。今の日本の若者は、皆、畏れ敬うべき存在を持っていません。もう少し、自分という存在に対して謙虚な気持ちを持つと良いのではないかと希望しております。常に神さまの導きに従ってという態度を心がけることこそ、今の彼女たちに必要な「謙虚さ」を生む意識だと考えています。

I：本日は、とてもお忙しい中お時間をいただき、誠に有難うございました。

(平成6年7月18日、短期大学校舎内、ジュティーン先生の研究室にて)

「短期大学“宗教部だより”」から……②

○巻頭エッセイ

かつて、私はアメリカのボストン美術館を訪ずれ、国宝級の日本美術品が、あまりにも数多く展示されているのを見て、驚き、目を見張りました。そして、ずらっと陳列されている国宝級の名刀の前に立った時、白装束に身を清めて一心不乱に、灼熱の鉄を鍛えてこのような名刀を造り上げた刀鍛冶の姿を目に浮かべ、まさに、祈りの姿を見たことを忘れることが出来ません。

元京都大学総長の平沢興先生は、外科の大家ですが、ある会合の席で、心の友である同じ医者友人から、「手術は祈りである」という言葉を聞いて、襟を正したとっておられます。

さて、現代の科学技術は驚異的なスピードで進歩していますが、すべての科学技術はもろ刃の剣のようなもので、人間を幸にするのも不幸にするのも、すべては、それをを用いる人間にかかっていることを忘れてはならないと思います。

過日、「日本医学会総会」が内外の最高権威を招いて大阪で開催されました。四年毎のこの学会は、八年前は「生命の畏敬」、四年前は「明日の医学を開く」というテーマをそれぞれ掲げたそうですが、

本年は、「医—科学と人間」というテーマを掲げているように、私は注目しました。

驚異的に進歩した医学の技術や知識が、肝心の人間を置きざりにしてはいないか、また、医学の進歩が人間を幸福するはずだと、単純に信じこんでいいのだろうか、という反省が、今回の学会のテーマに、「人間」をすえ、サブテーマの一つに「調和の医学」を掲げるに至らしめたのだと思います。

平沢先生は、「手術は祈りである」ということばに、同じ専門の医学者また医師としての尊敬と共感の念を次のように述べています。すなわち、「外科医が手術に最善を尽すのは当然のことであるが、手術は祈りであるという言葉の中には最善以上のものが含まれている。それは、医学と医術の限界知って、自からの最善を尽し、神の前にひれ伏して、患者のために手術の成功を祈る姿である」と。

科学技術の急激な進歩の時代にあって、それが人間の幸いとなり続けるために、このような「祈る心」を私共も持ち続けなければならないと思います。

(学長 田島信之)

No. 14 (1983・4・27 発行) より

「これから」がここまで導かれて

保育科教授 芝 恭 子

「子供たちを来させなさい」

1951年、私たちの学院が保育専攻部を短期大学に改組して2年目の春、私は保育科に入学を許され、子どもを学ぶ果てしない旅に出発した。上級生には元保育科教授・黒田成子氏が、また翌年度の1年生には現東洋英和幼稚園長・丹羽輝子氏、かえで幼稚園長・土橋克子氏がおられ、今日も同じ幹につらなるお交わりにあるのだが、当時はそうした未来を知る由もないことであった。

保育科を受ける時私は未信者で、キリスト者との比率は今日のそれと逆転する。入試面接でキリスト教との関係について聞かれた私は、勇んでこう答えた——「これからです。これから一生懸命に」この表現も、その直後試験官の方がたから湧き出た笑いさざめきも、私の内に消えることなく留まっている。

入学して読み始めた聖書に、幼な子がいそいそとイエスに近づく姿を見出した。同時にそんな子どもに対するおとなの姿も知った。拒絶と受容、2種類の。あるいは、おとな本位と子ども本位、と言うこともできる。私はイエスに向う子どもの姿に、東洋英和に入学したかった自らの気持を重ねると共に、弟子たちと子どもそれぞれに対する、イエスの言動に深く考えさせられた。

やがて私は、イエスが幼な子の生命を慈しみ、その内面に共感され、そのままに受容なさるこの具体性こそ、保育者にとって必要な知識と実践の原点であることを学んだ。

「わたしには、この囲いに入っていない
ほかの羊もいる」

日々の学業には、全学礼拝が位置づけられていた。授業や学生生活については先達の教職員が、礼拝時には学生と同じ姿になられた。神に祈りと賛美の歌を捧げ、証しの担



当者に耳を傾ける姿には、立場も国籍もなかった。私は、人間存在の新しい秩序を知らされた。礼拝参加の形を覚えながら、内面でも早く一致できたらと私は願い、前掲のみ言を聖書に見出した時は、心の底から嬉しかった。

日曜日になると、保育学の教授・スクルトン先生は、私を含む数名の未信者を近隣の鳥居坂教会に伴われた。先生は、私たちが早く教会に所属感を持つようにと、聖歌隊に入るべくお口添えくださった。また学院卒業生の教会員・現学院評議員の神谷文子氏は、ご自身で始められた子ども会の奉仕活動に、私たち保育科生を参加させてくださった。

そしてクリスマス、私は神と人との前でイエスをキリストと告白し、受洗した。

「インマヌエル」と「メメント・モリ」を
心に覚えて

あれから40余年、私の生活に変わることなく続いている二つのことは、いずれもその源を保育科在学中に見る。イエス・キリストを信じて生きること。そ

のみ姿に動かされて子どもに学び、子どもの友として生きること。卒業生の教員は、保育科の学生に授

業のみならず、母校の“魂”を伝える責任を痛感して止まない。

「小児相談センター」から 「子ども相談センター」への歩み

保育科教授 岡田 洋子

最近、小児相談センターの18年間の歩みをまとめたが、短大でも同センターを知らない人が増えているので、この機会に、小児相談センターについて述べておきたい。

小児相談センターが、短大付属機関として設置されたのは1968（昭和43）年秋、筆者の留学中であった。それは新校舎の増築、図書館等施設の整備、2年制保育専攻科の発足など、短大の第2発展期といわれる教育拡充実業の一環として、長野彌院長の英断によるものであった。当時、自閉傾向や言語発達遅滞を示す子どもが幼稚園で目立ち始めていたが、就学前の子どもの発達に関する相談機関は極めて少なく、母親や保育者はそのような子どもの扱いにとまどっていた。このような学内外の事情を背景として、同センターは「乳幼児を対象として、その心身の発達を診断し、問題発生の早期発見に備え、必要に応じて心理治療をおこない、母親ならびに保育担当者の相談・指導をおこなう」ことを主目的として、顧問に内藤寿七郎氏と古賀行義氏を迎えて開設された。

所長は学長の兼任による。筆者は1970年からカウンセラーとして、また1972年からは主任兼主任カウンセラーとして、専任教員や非常勤カウンセラーたちと子どもの発達・育児・教育相談に携わってきた。当時、設置に関わった丹羽淑子教授は「子どもの治療を目的とした家庭一幼稚園一センターの3者の緊密な協力体制を重視する」方針を掲げ、黒田成子保

育科長は「ケース・スタディの共同研究を通して幼児教育の課題である、理論と実際の一体化についての研究」を期待した。

18年間に来所した子どもは

600名を越えた。0歳から16歳にわたり、3歳から7歳の幼児が最も多く毎年60—80%であった。相談を内容別にみると、発達・育児・保育相談は約40%、問題をもつ子どもの相談は約60%。主訴では集団生活不適應、言語発達遅滞、自閉傾向などが多かったが、家庭内暴力、登校拒否なども含まれていた。来所児の多くは、幼稚園・保育園の保育担当者から紹介された子どもであった。また、1979年、丹羽教授は定年で退職されたが、本来英語学の教員であったため、専任教員カウンセラーの補充はされなかった。しかし、主な非常勤カウンセラー：橋本泰子氏と宇佐見良子氏の協力を得ていた。

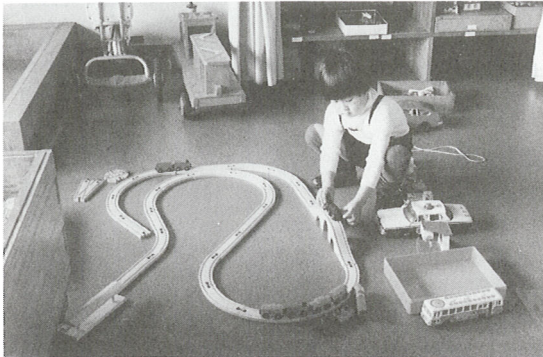
1986年、横浜キャンパスへの移転にあたり、当時の田島信之学長は新キャンパス地域における相談活動の重要性を強調され、小児相談センターは短大の教育と研究の場および地域社会に開かれた奉仕する機関として、将来再開するが、しばらく活動を休止



することになった。再開に備えて、センターはほぼ同じような構造で、心理実習室として横浜校舎の設計のなかに組み込まれた。そして、移転後も、保育者や卒業生のニーズに応じて、かえで幼稚園を含めて、児童心理研究室扱いで相談活動を続けてきた。

1993年、福田垂穂学長が着任されて、小児相談センターが再開された。1994年4月から「子ども相談

センター」と名称を改め、新組織で活動がおこなわれている。少子化と核家族化で育児不安に悩む親が急増し、子どもの問題が多様化している時代にあつて、キリスト教保育に携わる保育者の悩みも深い。六本木時代の実績を基礎として、子どもの健全なパーソナリティの発達を援助する「子ども相談センター」の働きを充実させたいと願っている。



小児相談センター・プレールーム



短期大学ブレイデー

——「短期大学“宗教部だより”」から……③——

○聖地旅行

1年前のことであるが、春休みを利用して、英和から3名が加わった10名のグループで聖書の国々を回って来た。それはエジプト、聖地パレスチナ、ギリシアの旅であった。

カイロ空港で旅行社の人を探し当て、若干の不安を内に宿しながらも、気のよさそうなエジプト青年を信頼してすべてを委ねることにした。空港からホテルまで、バスは西へ向って走ったが、ナイル川を渡ってからは次第に淋しい荒野となり、心細くなる。ナイルの東は生者の国、ナイルの西は死者の国という、古代エジプトの知識しかない私にはどんな宿に泊るのかと不安で一杯であった。けれどもやがて到着したのは、まさに砂漠の中のオアシスといった感じのホテルであった。ホリデー・イン・スフィンクスという異国情緒豊かなホテルで、玄関から大ピラミッドが目に見える。おそらくカイロ市内の近

代ビルのホテルでは味わえない雰囲気、旅の疲れは却って刺激されて中々眠ることができず、ロビーで夜遅くまで過すことになった。

翌日まで訪れたのはエジプト国立博物館である。かつてエジプトを発掘したヨーロッパ人が、出土品をそれぞれの国の博物館へ持ち帰ってしまったのを(たとえば大英博物館、ルーブル博物館、ベルリン博物館のように)、1900年フランス人考古学者マリエットがここにエジプトの博物館を作って遺物を保存することに貢献したので、正門を入れて左手にマリエットの像を立てて彼を顕彰している。玄関前の池にはパピルスとロータス(水蓮)が植えられている。ナイル川に群生していたパピルスは太古からすぐれたパピルス紙として古代エジプトの文化を記録して来たが、今では次第に少なくなった。(後略)

(宗教主任 十時英二)

No. 14 (1983・4・27発行)より